令和３年度第１回かわさきパラムーブメント推進フォーラム

１　日　時　　令和3年4月22日（木）9時30分～11時30分

２　会　場　　川崎市役所 第３庁舎１８階 大会議室

３　出席者

【委員長】　福田市長

【顧　問】　中森顧問

（オンライン参加）

伊藤顧問

【委　員】　遠藤委員、小倉委員、菊地委員、草壁委員、瀬戸山委員、多田委員、

丹野委員、土岐委員、湯浅委員、渡部委員

（オンライン参加）

大塚委員、中澤委員、杉山委員、須藤委員

【川崎市出席者】　加藤副市長、中村市民文化局長

市民文化局コミュニティ推進部　石垣課長補佐（阿部部長代理）

市民文化局市民スポーツ室　　渡辺室長

市民文化局市民文化振興室　　山崎室長

教育委員会学校教育部　　星野担当部長

【事務局】　（市民文化局オリンピック・パラリンピック推進室）

原室長、成沢担当課長、井上担当課長、仲藤担当課長、

鴻巣担当課長、太田課長補佐、小池担当係長

田中担当係長、小西職員、古谷職員、柴田職員

４　議　題

（１）かわさきパラムーブメント及び英国ホストタウンにおける昨年度の主な取組

（２）かわさきパラムーブメント及び英国ホストタウンにおける今年度の主な取組

（３）その他

５　傍聴者　０名

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　　ただいまから令和３年度第１回かわさきパラムーブメント推進フォーラムを開催いたします。

議事に入るまでの間、進行は私、市民文化局のオリンピック・パラリンピック推進室長の原が務めさせていただきますが、実は私、３月末で定年退職をいたしましたが、４月１日から再任用職員として１年間、引き続きこの職に就きますので、どうぞ皆様、よろしくお願いいたします。

まず、何点か事務連絡をお伝えさせていただきたいと思います。本日のフォーラムですが、公開となっておりますので、傍聴を許可しておりますことをあらかじめ御了承いただければと思います。また、会議につきましては、発言内容を記録しまして、発言者の氏名も含めて、後日、市のホームページ等で公開いたしますので、よろしくお願いしたいと思います。

次に、本日の会議でございますが、現在、庁内ではペーパーレス化の取組を推進しておりまして、その一環として附属機関、懇談会等、会議についてペーパーレス会議システムを導入しておりますので、本日の推進フォーラムも各委員にタブレット端末を配付して会議を進めてまいりたいと思います。

なお、タブレットの操作については各委員御自身でお願いしたいと思います。画面をタッチした状態で左右に動かすことでページが進みますので、よろしくお願いしたいと思います。

それともう１点、今までテーブルの上にペットボトルのお水とかを御用意していたんですけれども、やはり環境問題、プラスチック等の資源の問題から、庁内の率先推進行動指針として、こうした会議ではペットボトルの飲料を提供しないということから、今回はすみません、このような形（紙パックの飲料の提供）にさせていただいております。

また、画面に不具合等があった場合には、紙の資料も用意しておりますので、その際は周りの職員にお声がけをいただければと思います。

続きまして、本日の出席委員は委員名簿のとおりです。右に２ページほどめくっていただけると出欠席がございます。

この４月から、前回の委員会でも、もう１年引き続き委員に御就任のほどお願いしたと思いますけれども、４月１日でＪＯＣの細倉顧問に代わりまして、新たに事務局次長の伊藤様が御就任しておりますので、伊藤様より一言御挨拶をいただければと思います。よろしくお願いいたします。

【伊藤顧問】　　日本オリンピック委員会の伊藤と申します。聞こえておりますでしょうか。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　　大丈夫です。

【伊藤顧問】　　今年度から細倉に代わりまして務めさせていただきます。何分まだまだ不勉強なところがあるかと思いますが、これからよろしくお願いいたします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　　ありがとうございました。

続きまして、身体障害者協会の横島委員に代わりまして、新たに事務局長の渡部委員が就任いたしましたので、渡部様より一言御挨拶いただければと思います。

【渡部委員】　　おはようございます。川崎市身体障害者協会の事務局長を４月から承っております、渡部と言います。どうぞよろしくお願いいたします。

私どもはオリ・パラの成功に向けて、全職員一丸となっていろいろなことに取り組んでいきたいと思っています。よろしくお願いいたします。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　　ありがとうございます。

本日、先ほど御挨拶をいただいた伊藤顧問、大塚委員、杉山委員、須藤委員、中澤委員の方々はリモートで御出席をいただいております。

なお、本日、先ほど、成田共同委員長、体調不良のため欠席をさせていただくという御連絡をいただきました。

なお、事前には、栗山委員、山崎議員から御欠席の旨、御連絡をいただいております。

事務連絡は以上でございます。

それでは、初めに、福田市長から皆様に御挨拶を申し上げたいと思いますので、市長、よろしくお願いいたします。

【福田市長】　　皆様、改めましておはようございます。大変お忙しい中、御出席をいただきまして、誠にありがとうございます。

また、リモートで参加いただいている皆さん、聞こえていますでしょうか。ありがとうございます。本当にありがとうございました。

いよいよオリンピックの開会まで１００日を切ったという、まだあるかなと思っていたら一気に来てしまったなという感じではありますけれども、今年はかわさきパラムーブメントの推進ビジョンの２期計画の最終年度となっております。もともとパラムーブメントの取組というのは、オリンピックが終わった後も続くということで、本当は２０２０年に開催だったのが２１年度までしっかり延ばしてというふうな計画になっておりましたけれ

ども、この間いろいろな委員さんから様々な御提案をいただいて、いろいろな取組をやってきた。このパラムーブメントの推進会議がなければ、こういった取組ができなかったと思うと、なかなか感慨深いものがたくさんあります。

そうした意味では、これから２１年、大会が終わった後も、このパラムーブメントの理念、心のバリアフリーでありますとか、社会のバリアを取り除くということは、これからも続いていく話でありますので、当初から言っていましたけれども、この大会を１つのメルクマールにして、さらに共生社会をつくり出すという取組をこれからも挑戦し続けたいと思っています。

今日は、これまで取り組んできた内容の御報告と、また今年取り組んでいくということを皆さんに御協議いただいて、闊達な御意見をいただければと思っております。事前キャンプの話も英国チームの皆さん、オリンピックもパラリンピックのチームのほうも、それぞれ思った以上にというかやる気満々で、意気込みが、すごく熱意が伝わってきております。国のほうからは、なかなか、事前キャンプにＰＣＲを毎日やるべきだという話になったり、非常に制約が多くて担当も混乱しているところもあるんですが、絶対成功に向けて頑張っていきたいと思っております。

動画は見ていただいたんでしたっけ。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　動画は、今日、会議が終わってから、皆さんに見ていただこうと思っております。

【福田市長】　そうですか。実は英国のチームの皆さんを歓迎する動画というのを子どもたちが、みんなが歓迎のメッセージというのを撮っていて、本当にすばらしい取組、映像になっているんですけれども、学校の授業でも英国ってどんなところだとかということをみんなで学んでいる姿というのが、進んでいるということは、こういうコロナの厳しい時期ではありますけれども、着々とできているということは、それはすごくいいことだなと思っています。ぜひ大会の成功と、それからパラムーブメントの取組、今年もしっかり頑張っていきたいと思っておりますので、どうぞよろしくお願いしたいと思います。

私からは以上です。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　ありがとうございます。

成田さんが御欠席なので、会議のほうに入りたいと思います。

本会議の進行につきましては、委員長である福田市長に務めていただきますので、よろしくお願いいたします。

【福田市長】　　それでは、次第の資料１と２について、事務局から説明をお願いいたします。

【井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　オリンピック・パラリンピック推進室担当課長の井上でございます。

それでは、お手元タブレットを何枚かおめくりいただきまして、通しの１３ページの中でいうと５枚目なんですけれども、右肩に資料１と書いてあって、右下にはページが１と振ってあるところです。「かわさきパラムーブメントにおける昨年度の主な取組について」というところを御覧いただきたいと思います。ページのほうよろしいでしょうか。

まず１番､商店舗等におけるかわさきパラムーブメント実践事業でございますけれども、前回１０月８日に開催しましたフォーラムでも御説明をさせていただきましたとおり､「パ」のロゴステッカーの取組と、その下のバリアフリー情報発信の取組、こちらの２つを統合して一体的に進めていくということで、昨年度末にバリアフリー状況確認キットというものが完成しまして、このキットによりまして店舗が自ら段差を測ったり、テーブルの高さを測ったりすることで簡単にバリアフリー調査ができるようになりましたので、少し次の議題の今年度の話にもなってしまうんですけれども、今後は、この「パ」のステッカーと一体的にバリアフリー状況確認キットの利用を広く市内店舗に周知をしていきたいと考えております。

なお、こうしたキットの作成というのは、自治体、民間を含め全国初となりますけれども、本日、リモートで出席をされております大塚委員のアクセシブル・ラボ様に委託という形で作成していただいたものとなっておりまして、お手元にバリアフリー状況確認キットのチラシ、こちら両面で青と黄色のものがございますので、時間の関係で詳細は御説明しませんけれども、また後ほど御確認いただければということと、オンライン参加の方につきましては、後日、こちらのチラシは資料とともにお送りさせていただきたいと思っております。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　続きまして、オリンピック・パラリンピック推進室担当課長の成沢と申します。

引き続き、資料の御説明をいたします。２の庁内職員を対象とした心のバリアフリーに関する研修でございます。パラムーブメントを展開する本市も一事業者として、市民や事業者の方、そして一緒に働く職員に対しても合理的配慮の提供ができるよう、ハード・ソフトの両面を整えていく必要がございます。この研修につきましては、職員一人一人が心

のバリアフリーについて考え、自分ごととすることで、庁内におけるかわさきパラムーブメントの理念を浸透させることを目的に実施したものでございまして、具体的には、今年の３月に、主に窓口職場を中心としながらも、全庁職員８３名を対象としてユニバーサルマナー検定３級の取得に向けた研修を実施したところでございます。

続きまして、３の感覚過敏の方を対象としたバリアフリー化事業でございますが、発達障害に多く見られる感覚過敏の特徴のある方の中には、スーパーマーケットでの照明やＢＧＭなどが障壁となってしまい、日常の買物が困難な方がいらっしゃると聞いております。こうした課題への対応として、英国やオーストラリアなどでは、特定の曜日、時間に店舗の照明を暗くしてＢＧＭを止めるクワイエットアワーの取組がなされていますけれども、日本においては、あるドラッグストアチェーンでは一部実施がされているものの、普及はなかなか進んでいない状況でございます。

このため、感覚過敏の特徴のある方でも安心して買物などに行ける環境を整備することや、社会における発達障害や感覚過敏の認知度を高めることを目的として、将来的に商業施設等においてクワイエットアワーがスムーズに実施できるようマニュアルのようなものを作成するため、当事者のアンケートや資料にございます商業施設への調査を実施いたしました。

このほか、本市施設の中で主に興行が行われるアリーナ等におきまして、周囲の音や光、臭いなどにより感情やストレスが高まったときに、外からの音や光、目線を遮ることができ、気持ちを休ませ落ち着かせる居心地の良いプライベートな空間であるカームダウンスペースをとどろきアリーナとカルッツかわさきに設置したところでございます。

それでは、次のページにお移りください。４の親子サッカー教室＆パブリックビューイングでございます。こちらも主に発達障害のあるお子さんを対象とした事業でございまして、見た目では分かりにくいことなどから、周囲から誤解を受けやすいと言われている発達障害に対する理解の促進や、誰もがスポーツや旅行が楽しめる社会の実現を目指すため、川崎フロンターレが主体となり、資料にございます企業等と連携しながら実施したものでございます。

昨年度は試合会場にコロナ対策の制限があるため、一昨年度と同様な形でのセンサリールームでの試合観戦はできませんでしたが、その代わりにホームスタジアムである等々力陸上競技場で親子サッカー教室とスヌーズレンを設置などして安心できる環境で、優勝のかかったアウェーの試合のパブリックビューイングを実施し、４０組８６名の参加に御参

加いただいたところでございます。

【井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　続きまして、５番の心のバリアフリーに係るエピソード発信事業ですけれども、こちらも前回ちょっと簡単に御説明をさせていただいておりますが、昨年の１１月から、市民の皆様から１００字から２００字程度のエピソードを募集しているものでございまして、お寄せいただいたエピソードは、市のホームページで御紹介をさせていただいております。今回、募集チラシのほうもお配りしておりますので、後ほど御覧いただければと存じます。

資料右側に移りまして、６番の助けあいアプリ「Ｍａｙ　ｉｉ」（メイアイ）ですけれども、こちらも前回御説明させていただきましたが、大日本印刷（ＤＮＰ）さんが開発・運営しております助けあいアプリで、現在、全国で約３万件以上ダウンロードされているというものですけれども、昨年度はアプリのミッション機能というものを活用しまして、かわさきパラムーブメントのレガシーですとか様々な取組を紹介しましたり、先ほどの５番の心のバリアフリーエピソード募集の広報等を実施いたしました。

その下、７番、パラムーブメントアクション（かってにおもてなし大作戦）でございますけれども、こちらも前回の御説明のとおり、１月にコロナ禍における新しい形のおもてなしということで、「かってにおもてなしテレビ」と題しまして、テレビ番組風にオンライン配信をいたしました。

また、これまで３年間の総括としまして、３月には参加者によります振り返りの会というものをオンラインで開催しまして、その際、本日御欠席されておりますけれども、本フォーラムの委員である山崎亮様からメッセージが送られまして、資料に二次元コード、ＱＲコードがございますけれども、当初、参加者向けのメッセージとする予定が、川崎市の面白い取組をもっと広く知ってほしいということで、山崎さん御自身のユーチューブチャンネルで広く一般に向けて、「かってにおもてなし大作戦」のこれまでの経過とか、この取組の意義、面白さみたいなものについて非常に熱く語っていただいて、結果的に３５分ほどの大作になっておりますので、ぜひ後ほどこちらの二次元コードから御覧いただければと思います。

また、資料にはないんですけれども、前回実施予定ということで御報告したパラムーブメント関連のイベント、パラスポーツ体験のかわパラ、そしてパラコンサートにつきましては、コロナの影響により、昨年度はいずれも中止となっております。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　それでは、次のページに移っ

ていただきまして、次は８のブリティッシュ・カウンシルとの連携事業でございますけれども、こちらは後ほど湯浅委員に御説明いただければと存じます。

次に、右に参りまして、９の共生社会ホストタウンサミットｉｎ多摩川でございますけれども､隣接自治体でともに先導的共生社会ホストタウンである世田谷区と連携しまして、国や他の共生社会ホストタウン登録自治体とともに、障害への理解を深め、共生社会の実現を推進することを目的として、今年１月３０日にオンラインで開催したところでございます。

また、併せて共生社会の実現に向けた障害の社会モデルの考え方の理解浸透を図ることを目的としたリアルイベントも開催いたしました。その内容でございますけれども、サミットにつきましては、共生社会ホストタウンによる共同宣言。先導的共生社会ホストタウン５自治体における先進的な市民参加の取組についての事例発表。その５自治体の首長等による今後の共生社会ホストタウンの在り方についてのパネルディスカッションを開催しました。

イベントにつきましては、二子玉川ライズのガレリアでバリアフルレストランを開催いたしました。これは車椅子使用者が多数派で二足歩行者が少数派であったなら、こうなるのではないかという仮想社会を表現したバリアフルレストランというものをつくりまして、実際に通りすがった方に体験してもらうことで、体験者に分かりやすくかつ誤解を与えることなく、障害の社会モデルの考え方の理解を促し、新たな気づきを得ていただくことを目的として実施いたしまして、計３１名の方に体験していただきました。

次のページに参りまして、１０のＣｏｌｏｒｓかわさき展につきましては多田委員に、１１のインクルーシブなかわさきハロウィン開催の支援については土岐委員に、それぞれ後ほど御説明いただければと存じます。

次に、１２の個人型トップアスリート助成制度についてでございますが、こちらは昨年のフォーラムでも御説明しておりますけれども、川崎市にゆかりのある選手が、神奈川県や競技団体などの支援や強化を経て、将来的に各種世界大会で活躍することで、それを見た市民に感動と喜び、夢を与え、シビックプライドを醸成するとともに、スポーツへの関心を高めることを目的として、選手個人に対して、対象経費の一部を助成するものでございます。助成制度の概要は資料のとおりでございますが、昨年度の実績としましては、パラ水泳、パラ陸上、車いすバスケ、ＢＭＸレースの４競技５名の方に助成したところでございます。

次のページに参りまして、１３のかわさきパラムーブメントプロモーション動画でございますが、こちらは先ほど御説明したバリアフルレストランの世界観を映像化したものでございまして、会議終了後、後ほど御覧いただければと考えております。

資料１の説明は以上でございます。

【福田市長】　　ありがとうございました。

【井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　それでは、資料２のほうも引き続き御説明をさせていただければと思います。次のページ、右肩に６ページと振ってある資料２「英国ホストタウンにおける昨年度の主な取組」ということで、まず左側、広報・プロモーションの取組ですけれども、上のかわさき子ども元気プロジェクト英国ＰＲブースということで、修学旅行が中止となってしまった小学６年生に小学校最後の思い出づくりをしてもらうということで、３月９日から１１日の３日間、よみうりランドに市立小学校６年生の約１万２，０００人を招待しましたが、そこで英国事前キャンプとパラムーブメントに関するＰＲブースを出展しまして啓発を行いました。

その下、クリケットを通じた英国文化体験学習でございますけれども、日本クリケット協会の協力によりまして、下作延小学校３年生の総合的学習の時間に英国発祥のスポーツであるクリケットの体験を通じて英国文化を学ぶ機会を創出いたしました。

また、その他の広報ということで、資料にはないんですけれども、前回御報告しましたＪＲ南武線のきかんしゃトーマスのヘッドマークと側面ラッピングにつきましては、昨年３月から継続して実施しておりまして、大会終了まで行う予定となっております。

資料右側に移りまして、英国応援の取組でございますけれども、まず、カワサキテディ＆ローズですが、この取組は市民と連携し、創意工夫を凝らし効果的な情報発信であるということが評価されまして、ホストタウンにおける「優良情報発信賞」というものを受賞しまして、ホストタウンサミットにおいて表彰されたものでございます。ぬいぐるみとバラを外から見えるように自宅に飾って、その写真にハッシュタグをつけてＳＮＳで発信するという誰もが気軽に参加できる取組となっております。

その下、「英国応援動画」の作成・配信ということで、先ほど冒頭、市長からも御紹介ございましたけれども、英国代表チームに対し、川崎市はこうしたコロナ禍においてもしっかりと受入体制を整えて、変わらず英国を応援しているということを伝えようということで３つの動画を作って英国に送付いたしました。シリーズ１は事前キャンプのボランティアさん、サポーターさんによるもので、シリーズ２が市長、副市長、議会、市職員による

もの、そしてシリーズ３が子どもたちによるものとなっておりまして、英国側からも感謝のレターを頂いたところでございます。いずれも三、四分程度で一般公開もしておりますので、ぜひ資料の二次元コードから後ほど御覧いただくとともに、本日、会議終了後にお時間があれば流したいと思いますので、ぜひ御覧いただければと思います。

説明は以上でございます。

【福田市長】　　ありがとうございました。

それでは、取組の補足についてお願いいたします。まず、資料１のブリティッシュ・カウンシルとの連携事業について、湯浅委員より、お願いできますでしょうか。

【湯浅委員】　　お時間ありがとうございます。２年前から集中的に英国とのコラボレーションを特に文化を通してさせていただいていまして、ちょうどオリンピックが開催される予定であった昨年度を目指して積み上げてきて、その中で人材の育成やネットワークづくりや国際文化交流ということを促進してくるとともに、特にインクルージョンということをテーマに掲げて、障害あるなしにかかわらず、あらゆる人が音楽やダンスを楽しめるということを目指して活動、プロジェクトを一緒にさせていただきました。

昨年なんですけれども、ここ２年間ずっと英国のドレイク・ミュージックという、障害のある人ない人、一緒に音楽を楽しめることを推進する芸術団体との交流をしていましたが、コロナウイルスの関係で英国からの来日ができなくなってしまったということと、対面でのプロジェクトができなくなったということで、昨年度についてはプログラムをオンラインに切り替えました。できないからやらないのではなくて、せっかくこれまでつないできた音楽家の方との関係、そして市民の方との関係をつなげていこうということで、特に集中的に２月から３月にかけてオンラインで、これまで関わってくださった音楽家の方、さらに幅広い方、学校の先生を対象にフォーラム、そして実際トレーニングをやりました。

あわせて、今お手元に配付させていただいたガイドブックを、これはドレイク・ミュージックが作ったものですが、障害のある人ない人、全ての方が一緒に音楽ができる、教育現場で特に使用できるようなガイドブックをドレイク・ミュージックが英国で作っておりまして、それを日本語に翻訳したものを川崎市さんと一緒に作りました。これについては、今後、配布先については川崎市さんのほうとも御相談させていただきながら、主な対象としては音楽の先生、音楽家、音楽ホールの方を対象にしております。私どものホームページでも昨日から公開して、ＰＤＦをダウンロードするようにしています。

これ冒頭のほうでは、英国の障害に対する考え方が中心になっている社会モデルについ

ても丁寧に説明しております。恐らく日本語化するときに、日本の状況に合わせてこういったものは変えていく、日本型をまた作っていくということになると思いますが、まず第一弾としては、英国のものをそのまま翻訳してこちらに出しました。今年度から先については、川崎市さんの関係者とも御一緒に川崎モデルみたいなものを作っていけるといいのかなと思っています。

もう一つ、川崎市さんと御一緒にストップギャップ・ダンスカンパニー、こちらはプロのダンサー、障害のある人とない人、プロのダンサーによるダンスカンパニーで、世界的にツアーもしていて、英国を代表するダンスカンパニーの１つなんですが、本当は昨年、来日をしてもらって川崎のまちの中で公演をしてもらうはずだったんですが、コロナの関係でできませんでしたので、オンラインでダンサーの方または障害のある方のためのダンスワークショップをする人の育成のトレーニングをやりました。

これはとてもチャレンジでして、Ｚｏｏｍを通して、英国にトレーナーがいて、ダンサーがいて、日本のダンサーの方、あとこのドレイクも音楽家の方、それぞれおうちや自分たちの場所でトレーニングをするんですね。実際オンラインで、対面が一番いいのは分かっているんですけれども、オンラインの可能性を模索できたかなと思います。オンラインだからこそ、もしかしたら普通だと来られない遠隔地の方も参加していただけたので、１つの効果としては、川崎市さんがこういった取組を英国とやっているということのよい発信になったかなと思います。

また、参加した方からは、日本でも実践はあるけれども、英国の実践を詳しく知るいい機会であった。また、渡航が解除されれば、英国に行って実際に体験したいというようなお声もいただいたので、今後につながる形だったかなと思います。

今年度については８月に向けて、これから対面でできるのか、または渡航ができるのかということは状況を見なければいけませんけれども、特にドレイク・ミュージックについては、「フェスタサマーミューザＫＡＷＡＳＡＫＩ２０２１」という、川崎市さん、大事な音楽フェスティバルが夏にありますけれども、そこで東京交響楽団さんと一緒にコラボレーションさせていただいて、８月９日に発表するというところで今お話をしています。その８月９日に向けて、５月から７月にかけて川崎の市民の方、特別支援学級の方、この状況がどうなるかによりますけれども、これまで関わってくださった音楽家の方々とコラボレーションをして、そしてパラリンピック、また英国チームがお世話になる川崎市の中でパラムーブメントの促進を御一緒にできれば、盛り上げていければなと思っております。

すみません、長くなりましたが、以上です。

【福田市長】　　ありがとうございます。これ、すごいいいアウトプットですね。ただ、参加してくださった人たちも大きな刺激を受けたと思うんですけれども、ここからの広がりというのが、こういう形で普及していくというのはすばらしい展開だと思います。

【湯浅委員】　　ぜひ多くの先生方とか、いろいろな方に見ていただけるといいなと思います。

【福田市長】　　後で多田さんからも補足していただきますが、今、御紹介いただいたフェスタサマーミューザのところでも、この前、会見をやったんですよね。そのときに音楽専門誌の人とか、そういう方から、これってドレイク・ミュージックとどういうコラボですかという関心も高くて、説明したら、すばらしいですねというコメントもあったりして、何かいろいろなところに波及しているなというのを感じております。ありがとうございます。

それでは、続いて、資料は１の１０番のＣｏｌｏｒｓかわさき展について、多田委員からお願いします。

【多田委員】　　１０のＣｏｌｏｒｓかわさき展でございますが、この会議は前回、昨年の１０月だったと記憶しておりまして、その段階でＣｏｌｏｒｓ展の取組なども報告させていただきましたが、本日はその結果ということで改めて御報告させていただきます。

内容につきましては、記載のとおりでございまして、ただ、昨年、コロナ禍ということで、それぞれ作業所ですとか学校で、集団での創作活動が大変難しいだろうということから、協力していただく全ての皆さんに、こういう日程で計画しているんだけれども、皆さん、どうでしょうかという話をしましたら、ぜひやってくれと、これもお話ししましたけれども、それぞれ児童や生徒や利用者の皆さんから、期待も大きい、楽しみしているので、ぜひやってくれというお声をいただきまして、開催を予定どおりいたしました。

それから、開催のたびにアンケート調査もしておりますが、特に施設の関係の職員の皆さんからのアンケートというのが大変多岐にわたって御意見をいただくんですね。昨年は１３１点と応募点数が増えました。これは施設の関係の皆さんのアンケートから出た、キャンバスが今までは一定の大きさでお願いをしていたんです。そうしますと、それぞれの個性に、もう少し小さいほうが描きやすいとか様々な御要望がありましたので、ある程度、画一的なものより、自由なサイズで結構です、小型サイズでも結構ですということになりましたら、多くの応募が集まりました。

それから、この会議の中では、ミューザでここのところやっていますけれども、この作品をもう少し表に出すために巡回展などもしていただきたいという御意見をいただきまして、一昨年から巡回展を始めたのですが、昨年はコロナの影響ということで巡回展もできなかったのですが、その代わり、私どもの「ぱらあーとねっと」のほうで配信いたしまして、おうちでＣｏｌｏｒｓ展ということで、作品データを３６０度カメラでギャラリー風に見えるような形で併せて行いました。

引き続き、販売支援の活動も行っておりますが、今後の課題といたしましては、実際の展示会場での販売支援と、それから配信によりますバーチャルＣｏｌｏｒｓ展の配信を見た方の購入希望ですとか、そういうものをどうやって併せていける、タイミングがいいのかなということも今年から研究して進めてまいりたいと思っています。

それと認知度が増してきたということはあるんですが、まだまだ足りないということで、作品を見ていただきたいという広げ方と、作品といいますか、こういうＣｏｌｏｒｓ展みたいな仕組みに参加もしていただきたいという思いがありまして、企業ですとか、あるいは労働組合の皆さんがインクルーシブ事業ですとか、そういったことの社会貢献活動というのを進めておりまして、昨日も地域連合という労働組合の団体に伺いまして、各組合のほうで、Ｃｏｌｏｒｓ展を維持するのにキャンバス、画材と絵の具を買って御希望する方に配って、それでこの事業に参加してもらうという仕組みが１つあるんだと思っています。ここのところを社会参加ということで様々な方から協賛をいただいて、それを基に広げていくということが持続可能といいますか、これからどんどん広げていく上で、見るだけではなく支えるという面からも参加している、少額の中での参加から始めていくいい機会にもなるのではということで事前の調整、要請も行っていまして、ぜひ今年のＣｏｌｏｒｓ展にそういう形が生かせればなということで進めております。

本日、資料といたしまして、こちらのパラアート全般の説明といいますか、こんなものですよと示したものの資料と、それから川崎ブレイブサンダースさんの選手の紹介の絵といいますか、Ｃｏｌｏｒｓ展をきっかけにこんな取組も進めましたという事例を参考に載せさせていただきました。こちらのパンフレットは紙データですので、いろいろ情報をアップデートしなければいけないので、これは２０２０年度版ということで、版を固定してアップデートできるものはアップデートしながら、適時新しい情報に心がけるようにということで作っております。

以上でございます。

【福田市長】　　ありがとうございます。今年は本当にオンラインの可能性をこのＣｏｌｏｒｓかわさき展でも非常に見た感じがして、すごいチャレンジングなことをやっていただいて、本当にありがとうございました。大口の販売、支援していただいていますけど、購入者がある不動産会社で、シェアハウスを建てて、その中にこのすばらしい絵を飾りたいということで何点も買っていかれたというので、何か新しい価値をこういう形で生み出しているなというのが見えて、本当にありがたいなと思っています。ありがとうございます。

続きまして、１１番のインクルーシブなかわさきハロウィン開催の支援について、土岐委員からお願いできますか。

【土岐委員】　　特に資料の用意はございません。口頭で簡単に結果の御報告をいたしますけれども、私どものかわさきハロウィンも今年はオンラインで展開したんですけれども、去年２４回目を迎えまして、御存じの方も多いと思いますけれども、毎年、川崎駅前に大体１０万人ぐらいの観客を集めるイベントですので、当然至るところ密だらけということで、リアルな開催はどう考えても難しいだろうということで、最初は苦肉の策で、じゃあオンラインでトライしてみようかぐらいのつもりだったんですけれども、途中から皆さんと同じでオンラインの可能性みたいなことに気づいて、ひょっとしたら今までできなかった新しいことがオンラインなら実現できるかもしれないという、結構前向きな気持ちでトライしました。

一番の可能性は、距離的な制約が取り払われるということがすごい大きいと思うんです。どうしても、川崎でやっているよ、ああ有名だよねと言っても、さすがに地方からわざわざ仮装グッズを持ってというのは相当ハードルだと思うので、この壁が取っ払われるというのは、すごい可能性だな。実際、世界からの参加もありました。参加の仕方はオンラインで、ＳＮＳで仮装の動画を投稿するということで、ステイホームが言われていた時期でしたから、おうちから仮装で参加できますよ、あるいは友達と参加したければＺｏｏｍを使って、遠くの人たちがＺｏｏｍで一緒に仮装して、それを１つの映像にまとめれば参加できますよみたいな、そういう呼びかけをして、すごく刺激的だったんですね。

もう一つ大きなメリットは、小さなお子様から高齢者まで、あるいは障害のある方ない方、関係なくオンラインだと参加できるという、これが一番オンラインのよさかな。我々ずっとここ数年、誰でも参加できるハロウィンパレードを実現させたいということで、車椅子の方などが参加できる環境づくりに努めてきたんですけれども、やっぱり限界がある

んですね。どうしてもいろいろなところで難しいものがあったんですけれども、オンラインだと、そこの可能性というか、そこのハードルも一気に下がるという、これがすごい可能性だなと思いました。

実際に参加者を募る動画の中に、車椅子ユーザーの方にＣＭの中に出ていただいたりということで結構呼びかけしたところ、少なかったんですけれども、車椅子の方ですとか、あとダウン症のダンススクールの子どもたちとか、全部で１０組ぐらい動画を投稿してくれたという結果にはなりました。

そういった意味で、動画の投稿は全部で２，５００、世界含めてありました。ハロウィンパレードのリアルの参加者は大体２，０００人ぐらいでしたので、それを超える数字ではあったんですけれども、私どもの期待値では、ちょっと大きく世界を対象に１万ぐらいは集めたいなということは思っていたんですけれども、そういった意味ではちょっと認知がなかなか届いていなかった。何やるんだろうみたいことと、世の中的にちょっとハロウィンどころじゃないよという空気感の中でやったので、そういった意味ではいろいろと難しかったです。

ただ、オンラインを使った可能性というのは、ものすごく手応えといいますか感じたので、ハロウィンにかかわらず、今後いろいろなイベントに生かされるんじゃないかなと１つ思ったんですが、ただ一方で、ホームページのページビューが５分の１ぐらいに下がってしまってて、これは今までのハロウィンを期待していた人たちは随分離れちゃったのかなという。やっぱりリアルの場での圧倒的なスケール感とか熱狂感みたいなものとは全然違うものなので、オンラインのよさとリアルのよさというのはちょっと別物だなという気がしましたが、いろいろなヒントをいただいた取組だったかなと思いました。

以上です。

【福田市長】　ありがとうございます。私も授賞式に参加させていただいたんですけど、何と受賞者がロサンゼルス在住の外国人だった、の人もいましたよね。

【土岐委員】　いました。

【福田市長】　すごいなって。ついに国内じゃなくて海外にまで飛び出ちゃったというので、そういう意味では本当に距離を自由にした取組ってすごいなと思いました。本当におっしゃったとおり、ハロウィンどころじゃないときにやっていただいた価値ってものすごく大きいと思います。リアルともちろん違う部分というのはあるんですけれども、また可能性を広げていただいたなと思っています。ありがとうございます。

さて、まだ１０時半までは質疑応答の時間があるので、補足ですとか、あるいは御意見、御質問などありましたら、今、事務局から説明させていただいたことも含めていただければと思うんですが、いかがでしょうか。

中森さん、いかがですか。

【中森顧問】　２点あるんですけれども、まず、湯浅さんに確認なんですけれども、このパンフレット、特に障害に関する言語とか、社会モデル、急進モデル、これは英国の状況で書かれているんですね。

【湯浅委員】　もともとドレイク・ミュージックが英語で作ったものを翻訳したというものです。

【中森顧問】　なるほど。非常に分かりやすくて、今、日本が障害のある人たちに対しての目標となるようなことが書かれていて分かりやすいなと。特に共生社会とかダイバーシティ、インクルージョン、こういったものが東京組織委員会でも話し、特に森会長の不適切な発言の後、女性の参加という、そこから始まって、将来の日本はこういうダイバーシティ、インクルージョン、共生社会というふうなことが言われているので、非常に参考になります。特にイギリスとか北欧というのはそういった意味で進んでいると思います。よかったなと思う。

あともう１点、ハロウィンのオンラインですけれども、これは感想になりますけれども、障害のある人というのは孤立しやすいですね。パーティーに参加するというと大ごとになるけれども、オンラインで参加するということになれば、障害のある人たちが一緒に何か目的を持って活動することで仲間づくりが広がると、非常にオンラインはいいなと思いました。我々の協会でもオンラインの会議をやると費用がかからないとか、密にならないとか、そういった意味でいうと、会議も研修会も非常に有効かなと、そういう感想です。

【福田市長】　ありがとうございます。

いかがでしょうか。オンライン参加の皆様もいかがですか。

【大塚委員】　じゃ、いいですか、私から。

【福田市長】　どうぞ、お願いいたします。

【大塚委員】　今日はオンラインで参加させていただいております大塚訓平でございます。直接現場に行けなくて、すみません。

まず、うちのほうで推進をさせていただきましたバリアフリー情報発信事業についてなんですが、コロナの影響で飲食店の皆さんは大変だと思うんですが、実は障害当事者にと

っては非常にメリットのあることが幾つもありまして、その１つが感染予防対策のためにディスタンスを取るようになっていただいたことによって、お店のレイアウトが結構変更されたんですね。それによって、今までは通路が狭かったものが大分広く取っていただいたことによって車椅子の通行がしやすくなったというふうな当事者からの御意見なんかもありまして、あとはレイアウトを変更したことによって、今までの情報を発信していたものがアップデートされていないということを防ぐことにもなると思いますので、これをうまく活用していただきたいなと思っております。

また、テイクアウトを始めたお店さんが非常に多くなりましたので、我々もどうしても石畳ですとか、あとは段差の多いお店とか、入り口の幅が狭いお店が利用できなかったところが、事前に電話予約とかをすることによって、そういったお店を利用しやすくなったということでは、コロナをポジティブに捉えるといろいろなことができるようになったかと思いますので、ぜひ移動に何かしらの制約を抱えていた方、困難さを感じる方々に対して、こういった情報を発信していくというのは非常に有益なのではないかなと感じております。

以上です。

【福田市長】　ありがとうございます。

中澤委員、いかがですか。

【中澤委員】　すみません、ありがとうございます。ちょっとなかなかそちらの音声が若干聞こえにくいので、ごめんなさい。

【福田市長】　すみません。

【中澤委員】　これは全体的な話なんですけれども、今の国会で進んでいる例の障害者差別解消法の民間事業者に対する義務化、これでようやく世界に追いつくためのスタートラインについたなというところだと思うんですけれども、これはさっきの飲食関係だけじゃなくて、生活全般の中で合理的配慮をしっかり取れるようにしなきゃいけないということで、義務化になってようやく、マナーとか何とかというレベルじゃなくて、義務化されたということで、ようやく企業も前に進んでいくところが大きいところから小さいところまで広がってくるチャンスになってきたなと思っています。

今、弊社なんかでも今までやってきた、いろいろな企業から一気に話が進んでいまして、やはりこれも、川崎市の中でもいろいろな企業があると思うので、そういうところに啓蒙活動というのは、義務化ということをアピールするだけでも大きな進歩があると思うので、

ぜひやってほしいなと思っています。例えば、もう一つ、前から言っているんですけど、日本って障害のある方も含めて、障害のある方はもともと生まれつき我慢をすることというのは当たり前だった。そういう世界なんですよね。でも、そうじゃないんだよということ、あるいは体が不自由じゃなかったり、車椅子じゃなかったら得られたであろうサービスなんかを、本来だったら受けられるものがいっぱいあったんだよということ。私なんかの場合は、今は車椅子ですけれども、以前は歩けたので、歩いたときはできた、受けられたものが、実は車椅子になったら例えばの話、電車一つ１人で乗れなくなってしまったんですね。こういうようなことを、失っているチャンスというものがいっぱいあるということ。あるいは、だから我慢しているんだよということを周りの人にも知ってもらいたいというのがあると思うので、逆にその辺りをしっかり皆さんに見えるような形で、どんなことで困っているということをしっかり伝えられたらいいなと思っています。

川崎市さんの場合はいろいろな取組をされているので、どんどん進んでいかれたらいいなと思うんですけど、基本的にはそこのところを、まず、基本に返って、もう１回考えて皆さんに、心のバリアというのも曖昧な言い方であって、本当は私なんかはもっと具体的な話で、まさに合理的配慮の事例集みたいなものをもっとしっかり作れたらいいかなと思っています。

あとは市役所の中に、もしできたらポジションとして、当事者の人が職員として、こういうバリアフリー、ユニバーサルデザインの進展を監修する役割なんか、これはアメリカだとか海外の場合だと役所の中にそういう部署をみんな持っていらっしゃるので、人が多いんですけど、日本もそういうのができたらいいな。なかなかないと思うんですが、川崎市で先鞭を切って入っていただけたらなと、そんなことを今日聞いていて感じました。どうもありがとうございます。

【福田市長】　ありがとうございます。うちの職員にも照会かけたり何かしているのって結構ありますよね。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　何かのときには当事者の声は聞いてやっています。

【福田市長】　もう少しシステマチックにというふうなお話だったと思います。ありがとうございます。それとやっぱりいろいろなことをやって、かわさきパラムーブメントという名前はムーブメントにしていかなくちゃいけないんだというところからすると、まだまだ浸透し切れていないところという、具体的な取組が浸透できていないというところも

ありますので、そこは本当にもっともっとこれから啓発、知らしめていくということ、あるいは協力して輪の中に入ってもらうようなことをやっていかなくてはいけないなと思っております。中澤さん、ありがとうございます。

【中澤委員】　　どうもありがとうございます。

【福田市長】　　御指名させていただいて恐縮ですが、草壁会頭は経済界からという立場で少し御意見をいただければと思いますが。

【草壁委員】　　少しかわさきパラムーブメントという、この中で進めているのは２つのアプローチがあって、１つはオリ・パラの関係でホームタウンになってという、そちらのほうのアプローチが進んで、少し延期になって今という状況があるのと、それとは違う形で、それこそ先ほど何とかのキットがあったと言っていましたけれども、ああいうバリアフリーのことをもう少し進めていくというツーウェイになっていて、少し方向が微妙に異なる部分があってあれなんですけど、自分たちは、もちろんホームタウンになって、オリ・パラのほうは期限があることで、いつかは終わってしまうということなんだけれども、バリアフリーというか、ダイバーシティのところというのは、これから先もずっと続けていかなくてはいけない。それに対するものというのをもう少し進めていく。具体的でないと駄目だと思うんですけれども、私は、川崎市の例えばカルッツなんかのバリアフリー情報はすばらしいなと正直思うんです。あとミューザ川崎のバリアフリー情報も、あれがあると大体どこに行けば何々があるというのが分かる。

自分が例えば仮に何かしらの障害があって、車椅子を使ってどこどこに行こうということを考えると、今日はカルッツかわさきのどこどこのこういうのを見に行こうとすると、川崎駅に降り立って、どこのところから行って、川崎駅の北口はバリアフリーだという話にはなっているんだけれども、北口のどこにエレベーターがあって、それをどういうふうに行って降りることができて、北口からカルッツというのはバリアフリーで一直線で行けるというのが１つのコンセプトになっていますけど、あそこのところをどうやって越えていくとか、そういうことをまず調べるだろうし、その上でどういうところに例えば食事ができるんだろうか、どういうところにトイレがあるんだろうかとか、そういうことを一番初めに考えてプランを立てて、そのプランどおりにやっていかないと、なかなか当初の目的が達成できないという、そういう制約がどうしてもあるわけで、それに対しての、自分たちも含めて情報の提供というのはまだちょっと薄い部分があるな。

ここのバリアフリーのこれに賛同している企業というのが各区で、川崎市で手を挙げて

くださいと言っているから、いろいろな企業が手を挙げてバリアフリー情報を提供しているところもあるけれども、例えば、残念ながら金融機関で、川崎信用金庫とセレサと横浜銀行は全部のところに入っているんですけど、どれもバリアフリー情報というのは提供されていない。だけど、金融機関なので、結構バリアフリーに配慮して多機能トイレとか、そういうのを設置しているし、建物の段差をなくすためのいろいろな工事なんかも金かけてやっていることも事実なんだけれども、その情報が提供されていないがために、取りあえず参加しているのねというだけで、つまり、実際に必要としている人から見ると、あまり役に立ってないなというのが非常に強く感じるところなんですね。

別に土岐さんがいるから言うんじゃないんだけど、チネチッタは結構しっかりしているんです。どこに多機能のトイレがあって、そこに行くにはどうやって行ってほしいみたいな、そこまで書いてある。そういうようなことというのを、もう少し仲間を増やす、そういうようなことをやって、それが普通の状態になってくると次の段階に進めるのかな。

時間に限りがあるパラリンピックの部分は、これはそうなんでしょうと。だけれども、こちらのバリアフリーとかダイバーシティのほうは、これから先ずっと続いていく。それこそずっと先のあれがあるわけで、それに対応するような各参加者というか、利害関係を持っている、あるいは近隣に住んでいる、そういう人間たちが意識の中にそういうものが入ってくるようになるように私たちもやっていかなくてはいけない。そういうのが今回いろいろ見ていて一番感じたところです。

【福田市長】　ありがとうございます。川崎の経済界の代表……、何か。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　今のことでちょっと。

【福田市長】　どうぞ。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　今、草壁さんが言われたことはすごく私たちも思っていて、実はサイバスロン、電動車椅子の大会をカルッツでやったときに１回だけチャレンジしたんです。川崎駅からカルッツまでの間のバリアフリールートの表示と車椅子トイレがどこにあって、それが今使われているとまで出したんです。ドアが閉まっているか閉まっていないかというセンサーをつけて、空いている・空いていないをやったんですけど、結構費用がかかるのと、商業施設の御協力があるなし、正直はっきり言ってあって、幾つかはやったんですけれども、そういうことは私たちも目指していきたいと思っていて、なかなか全て税金でというわけにはいかないので、それぞれの事業者さんの御協力の下にという、実際そういうソフトは開発されて運用されているので、何かそういう

ことをできないかということは、正直私たちの思いの中にはあって、サイバスロンのときにはやってみたこともありますので、参考にさせていただければと思います。

【福田市長】　　ただ、今、草壁会頭のお話を聞いて、いろいろな施設だとか企業だとかやられているものも既にあるんだけれども、うまく表示されていないとか、情報として伝わっていないというのはもったいないですよね。正直、川崎の経済界のトップがこういう視点でまちを見ていただいているのかというのは、ものすごく心強い御発言だったと思います。

例えば、今回、大塚さんのところでやってくださったような店舗での取組というのが、まちの中で適切に表示されているかどうかというのは、これちょっと検証するというか、こういう仕組みがあって、例えばこういうところをアドバイスしてもらって、こういう表示の仕方のほうがいいですよというのがあれば、アドバイスしてくれることがあれば、まち全体のレベル感というのが上がってくるかなと思います。何かそういう仕掛けはあっていいなと思います。ありがとうございます。

その仕組みづくりについても、今の御発言を受けて考えたいと思います。何も全てを技術でということだけじゃなくて、今あるものをどうやってうまく生かしていくかということも大事かな。正直、川崎市役所の中も監査から指摘を受けて、ここはちゃんと表示されていないとか、あるいはバリアフリーになっているかのようだけれども、実はちゃんとなっていなかったとかという恥ずかしい話というのが幾つも指摘されていて、それを今改善しているところなんですけれども、恐らく役所だけじゃなくて、地域というふうに見れば、やっているんだけれども、うまく表示されていない。あるいは全くできていないとか、様々あるでしょうから、そういうところを少しアドバイスできるような仕掛けづくりは考えたいと思います。

遠藤さん、何かありますか。

【杉山委員】　　１つよろしいでしょうか。

【福田市長】　　どうぞ。

【杉山委員】　　ぐるなびの杉山です。よろしくお願いいたします。

このコロナ禍でも様々な取組を川崎市さん及び皆様のほうでされていてすばらしいなと感じながら聞いておりました。１つ私のほうからは、議論されていらっしゃる点もあるかと思いますが、このコロナ、大変な時期ではありますが、一方で、生活様式とか行動様式とか人の考え方というのが変わってきているということを、このかわさきパラムーブメン

トをさらに広げていく機会と捉えていいんじゃないかと思っています。

私ごとですけれども、会社は９９．９％リモートになっておりまして、ワーケーションなんかでも緊急事態宣言以外のときは生活様式が私自身も変わっています。また、ぐるなびという私が働いている場所ですので、今までは本当に３６５日中３００日、６時以降はお客様とかと外食をしていたんですけれども、今は残念ながら６時以降は自宅に帰ってという中で時間ができています。そうすると、例えばこのパラムーブメントで取り組んでいる取組を知って、こういった取組に自分も参加してみようかなとか、あるいは機会があれば見に行ってみようかなとか、いろいろな自分自身の好きなこととか関わりたいことを考え始めておりまして、そういった方々もうまくこのパラムーブメントに参加いただける機会として取り組んでいくというのが、さらなる広がりになるんじゃないかと思っております。

先ほど大塚さんがおっしゃっていたお話で、飲食店のレイアウト変更とかが結果、障害のある方々の利用しやすさにつながっているというのもちょっと私は目からうろこだったんですけれども、確かにと思いまして、飲食店様自体も厳しいんですけれども、ただ飲食をする場だけでは駄目だという考え方に経営者がどんどん変わってきておりますので、であれば、こういったパラムーブメントの参加促進も、今は厳しいかもしれませんが、ちょっと時間がたつと、そういったものにも積極的に参加していくべきだというふうに意識が恐らく変わってきていると思われますので、１つ今後の議論をしていく中で、コロナによって大きく人の考え方やライフスタイルとかワークスタイルが変わってきたということもうまく今後の浸透に取り組んでいくというところに視点を１つ置いていただければいいんじゃないかと思いました。

【福田市長】　　ありがとうございます。

実はちょっと時間を超過しましたので、次の次第のところに移らせていただいて、また御意見をいただきたいと思います。

それでは、資料３、４について、事務局から説明をお願いいたします。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　それでは、資料３、上部の１３分の１１と書いてあるところ、右下の７ページを御覧いただければと思います。ここでは、「かわさきパラムーブメント等における今年度の主な取組について」、御説明いたします。

ここでは、今年度の新規事業について主に御説明いたします。初めに、左のレガシー形成に向けた取組についてでございますけれども、今年度から新たにｅスポーツの活用に取り組んでまいりたいと考えております。ｅスポーツにつきましては、障害の有無にかかわ

らず仮想空間で誰もが一緒にスポーツを「する」「みる」ことができるツールと捉えておりまして、今年度は障害者施設や特別支援学校などで体験会を開催し、ｅスポーツの可能性を探ってまいりたいと考えております。

次に、右に参りまして、行政サービスと職員の心のバリアフリーの推進の中で、特に合理的配慮の提供に向けた取組について御説明いたします。かわさきパラムーブメントを展開する本市としましては、障害の社会モデルの考え方に立ち、本市が一事業者に対して行政サービス等において障害者差別解消法に基づく合理的配慮の提供を行っていく必要がございますけれども、現在は何をどこまですればいいのかといった具体的な基準がなく、職員の個々のスキル次第という状況がございます。

また、先ほど中澤委員からもお話がありましたけれども、今国会では障害者差別解消法の改正が予定されておりまして、民間企業では合理的配慮が義務化されるということが予定されております。このため、行政機関である本市の対応というものは、市内の企業の皆様からも注視されることになるのかなと考えております。

こうした状況がありますことから、窓口対応等で想定される様々な場面におきまして、職員が合理的配慮の提供を行うために必要な基準等を、既存のマニュアル等もあるのですけれども、そういったものを踏まえながら、しっかり基準といったものを策定してまいりたいと考えております。

次に、資料の下の聖火リレー関連でございます。こちらは東京２０２０大会が延期になりましたけれども、現在のところ、本市においてはオリンピック聖火リレー、パラリンピック聖火フェスティバルとも予定どおりの実施の見込みとなっております。オリンピック聖火リレー及び出発式につきましては、６月３０日に等々力陸上競技場内で出発式を開催し、その後、資料の右にございます３．２キロのルートを聖火ランナーが走行いたします。その際、出発式や沿道について地域資源を活用した盛り上げについても併せて実施する予定となっております。

パラリンピック聖火フェスティバルにつきましては、８月１４日夕刻に等々力緑地内で「かわさきの火」の採火・出立式を開催いたします。あらかじめ区のイベント等で採取した種火を集める集火式を開催したいと考えております。いずれも大会組織委員会が作成した新型コロナウイルス感染症対策ガイドラインにのっとりまして対策を講じた上で実施しております。

続きまして、資料４の説明をいたします。

【鴻巣オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　事前キャンプの担当課長の鴻巣と申します。

資料４の英国事前キャンプ関係の今年度の取組について御説明させていただきます。まず、左上、英国オリンピック代表チーム、それからパラリンピック代表チームの受入れ概要でございますけれども、市長の言葉にもございましたように、英国代表チームにつきましては、予定どおり川崎市でこのような日程でキャンプを行うということになっておりまして、今現在、毎週のようにいろいろな受入れに向けた協議を進めているところでございます。

また、各競技の滞在日程もこちらに書かせていただいておりますけれども、まず、女子サッカーチームがオリンピック代表チームについては参りまして、続けて陸上、それからラグビーの男女チームという形で参ります。昨日は英国の女子サッカーと日本の女子サッカーが同じ予選のドローになったという発表もございましたので、まず、対戦するカードができたということかと思います。また、パラリンピック代表チームにつきましても、陸上チームがこのような形で、等々力陸上競技場でキャンプを行います。

これまでの御説明してきた内容と大きく異なる点が新型コロナウイルス対策でございまして、１つページをおめくりいただきますと、別紙というものがございますので、そちらを先に御覧いただけますでしょうか。こちらの左上に選手への対応の基本的な考え方というのがございますけれども、私どもホストタウンだけではなく、競技会場、あるいは選手村、大会期間中、選手が入国から出国するまでの期間において、今回、新型コロナウイルス対策ということで、健康管理ですとかそういったものをそれぞれ受入れする立場の者が行っていかなければいけないということになっておりまして、私ども川崎市もホストタウンの受入れ自治体ということで、選手が実際に入国してホストタウンに移ってから選手村に行くまでの期間は横浜市さんと私どもで、合同で受入れ責任を持ちながら感染症対策を徹底していくということになっております。

具体的には、選手の健康管理をはじめとしまして、選手は専用車両に乗って移動する、そういった行動管理をしたりですとか、それからお互いの感染対策の徹底、あとはＰＣＲ検査等、これも回数がまだ何回になるかとかは未定なんですけれども、選手、また受入れ側のスタッフも含めまして、こういった感染症対策を徹底していくということが国のほうから示されております。こちらを私どもはマニュアルというものに落とし込む作業をしてございまして、受入れの１か月前までには英国側と合意をして、受入れを進めていくとい

うような準備を今しているところでございます。

すみません、前のページにお戻りいただけますでしょうか。このような中で、具体的に今どのような準備を進めているかというところなんですけれども、実際７月、８月の事前キャンプ期間中は私ども、慶應義塾大学さんも含めて３者で、合同でチームの受入れをいたしますので、その準備を今進めております。

また、一昨年度、サポーターのボランティアの方々を募りまして、４月１日時点で、今１９８名の方が継続したいという意思を表示されておりますので、コロナ対策ということで選手との直接の接触は厳しくなっておりますけれども、様々な形での活動の機会を提供していきたいと考えておりますので、この方々の活動支援、そしてその成果を市民の皆様にもきちんと還元していけるような取組を、準備を進めていきたいと考えております。

また、ＢＯＡ／ＢＰＡと交流事業を実施することになっておりますが、こちらも今現在、コロナの関係でオンラインまたは公開練習のみということで、接触するような技術指導のようなものが残念ながら開催できないというような状況になっておりますが、こちらもオンラインを通じて、まずは選手、スタッフと交流できる機会を確保していきたいと考えておりますし、また、川崎市はブリティッシュ・スクールさんとの交流もございますし、先ほど説明がありましたクリケットのような取組も市内で始まっておりますので、草の根の交流も含めまして、様々な小さい取組も含めた交流ということを通じてオリンピック・パラリンピックの思い出づくりをしていきたいと考えております。

以上でございます。

【井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　それでは、資料の右側でございますけれども、広報・プロモーションに関する取組ということでございまして、英国代表チーム応援ツアーということで、英国代表チームを実際に競技場で応援する日帰りのバスツアーを実施する予定でございます。

次に、英国関連写真展ということで、市民から英国に関連した写真をエピソードつきで募集いたしまして、ホームページ、ツイッター等で発信し、併せて巡回展を実施するものとなっております。

また、シティドレッシング、キャンプ施設の装飾を行うほか、ＧＯＧＢ、あるいはトーマスを活用したプロモーションや市内イベントへのブース出展などを実施いたします。さらに、英国代表チーム川崎キャンプ推進協議会によりまして、選手名鑑やホストタウンフレーム切手を製作いたします。

説明は以上でございます。

【福田市長】　　ありがとうございました。

それでは、資料の３番、４番について、主に今後のパラムーブメントの推進に関わることについて御意見をいただければと思います。御質問でも結構です。いかがでしょうか。

菊地さん、いかがですか。何か御意見などいただけましたら。

【菊地委員】　　特にはございませんが、スポーツ審議会でもちょっとお願いというか、お話をしたところでございますが、先ほど市長のお話にもあったように、このオリンピック・パラリンピックが終わった後、川崎市のムーブメントをもっともっと盛り上げていかなければいけないと地域としては思っております。

その中で、先ほどちょっと御説明ありました受入れの支援というところで、ボランティアの方々が継続、おやめになる方もいらっしゃるかもしれませんが、たくさんいらっしゃるということで、多摩川リバーサイドマラソンとか駅伝とかでもボランティアの方をいろいろ募集して、実際中止になってしまったということがあって、ぜひ今後のために、ボランティアに参加された方、あるいは当選されなかった方々のネットワークをしっかりつくっていただいて、川崎のスポーツ、またパラスポーツの支援にボランティアとして参加していただくというムーブメントを立ち上げていくといいかなというようなお話を審議会のほうでさせていただいて、ぜひぜひ私もそこには力を最大限発揮してネットワークをつくっていければと思いますので、一つお願いでございますが、よろしくお願いいたします。

【福田市長】　　ありがとうございます。私もその点は繰り返し言っておりまして……、鴻巣さん、はい。

【鴻巣オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　今、菊地委員がおっしゃられたところが本当に私ども大事なことだと思っておりまして、実際このほかにもサポーターに応募された方は１，６００名いらっしゃったんですけれども、二百数十名の方が残られた後､残った千何百名の方もどういうふうにつないでいくかという話も当時ございまして、今、２３０名ぐらい、ほかにＧＯＧＢ応援パートナーという形でも我々いろいろな情報提供できるネットワークをつくらせていただいております。ですので、今お話しありましたように、オリ・パラが終わった後、サポーターの方々も当然地域の活動をしてみたい。今回初めて応募された方も多くいらっしゃいましたので、次につなげていくための、きちんと私たち、オリ・パラ室はなくなっても、サポーターの皆さん、そういった市民の皆さんのネットワークはつないでいって地域のスポーツですとか、ほかの活動に貢献できるよう

な仕組みづくりも含めて、検討を引き続きしていきたいと思っております。ありがとうございます。

【菊地委員】　　ありがとうございます。よろしくお願いいたします。

【福田市長】　　ありがとうございます。

いかがでしょうか。もしあれでしたら、今の資料３、４については、これで御了解いただいて、その他で少しフリーディスカッションという形にさせていただいたほうがしゃべりやすいのかなという気もしますが、もしこの３、４のことについて、今後の取組ですとか、事前キャンプの話というのは御了解いただいた……、どうぞ、湯浅さん。

【湯浅委員】　　すみません、御説明ありがとうございます。先ほどの草壁委員の御指摘、すごい大事な御指摘だったなと思うんですね。かわさきパラムーブメントで様々な取組をしている中で、英国事前キャンプ事業とその他のものが二本柱であるような気がするという御指摘だと思うんですけれども、２０１２年のロンドン五輪のことを考えますと、特にパラでいくと、パラリンピックがあったからこそ、パラリンピックの価値というのがありますよね。インクルージョンに対する考え方や理解がすごく促進されていった。その先にレガシーが残ったということがあったと思うんです。

なので、今、川崎市さんは特に英国のパラチームがキャンプをするというのは、ほかの都市、横浜市さんはありますけれども、英国との関係においても、とてもいい要素が重なっていって、さらにそこでパラムーブメントを数年促進されているということなので、今、英国事前キャンプ関係の広報というところで、どちらかというと英国を御紹介いただくとか、英国を理解するというところを書いていただいていますけれども、特に、恐らくオリンピックが終わってパラリンピックが向かう頃になると、日本全国でパラリンピック的な広報とかムーブメントが高まってくると思いますけれども、先ほど委員のほうからも御説明があって、まだまだ理解とか、いわゆる失われている機会というものが障害の方にはあるんだよということが、理解がまだなかったり、社会にいろいろな壁があるということを考えますと、こと川崎市でパラリンピックがあってパラチームが来るというところで、そういった価値をいかに市民の方に伝えていくのか。もちろんいろいろなイベントがあるとは思うんですけれども、インクルーシブであることがすばらしいんだよとか、そういったことを一緒に考えられるといいのかなと思いました。なので、別々じゃなくて、そこを起爆剤にしていくような形の広報。特に私のほうで言えば、それがアートを通しても、全ての人が参加することがすばらしいんだよということが伝わっていくようなこと、特に川崎

市さんはビジョンもあったりとか、いろいろな広報がとてもお得意だと思いますので、考えられるといいのかなと。

【福田市長】　　ありがとうございます。

瀬戸山さん、どうぞ。

【瀬戸山委員】　　去年の取組、今年の取組も、皆さん、すばらしく発展していて、すばらしいなと思っていまして、私自身がこういう障害者スポーツとか障害というのはあまり得意ではないので、参加して非常に勉強させていただいているなという感じです。

資料４について質問なんですが、英国代表チームのパラリンピアンの応援とかということがあると思うんですが、例えば川崎市のパラリンピアンでオリンピックに出そうな方とか、そういった方のもし出た場合の応援とか、そういったことは計画されていないのかというのが１つと。

それから、せっかく英国からパラリンピックに出るようなすばらしい選手が来るのであれば、川崎のパラスポーツをやっているような方との交流事業みたいな、どうしても私、スポーツなので、そういう世界大会に出るような選手と話をしてみたいとか、触れ合いたいというアスリートとか、将来を夢見るスポーツを目指している子どもたちにとっては大きなきっかけになるので、もちろん市民、皆さんにこういった広報をすること、プラス実際にパラスポーツをやられているお子さんとか、逆にこれは川崎市内に限らず、近隣の近くにいらっしゃるパラスポーツをやっている方との交流事業みたいのがあっていいのではないかなと思います。

以上です。

【福田市長】　　ありがとうございます。事務局からでいいですか。

【鴻巣オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　ありがとうございます。まず、１点目の日本人のパラリンピアンを応援する、そういった場がないのかということにつきましては、今、各区でそれぞれパラリンピック大会に出られる方のお名前とかは、それぞれ応援しようというところの計画はあると伺っておりまして、もともとパブリックビューイングをする予定だったと思うんですけれども、コロナの関係で大きな箱ではなく、区役所の会議室ですとか、そういうところでそういった準備をしているという情報は私どもも伺っております。

あと２番目の英国パラリンピアンとのいろいろな交流事業ができないかというところでして、私どもぜひやりたいと思っておりますが、コロナの関係もございますので、どうし

てもオンラインに限られるというところがございます。ですので、その限られた条件の中で、どういった方々に対してアプローチできるのかですとか、あとは実際に日本に滞在している間にどなたか、本当に英国パラリンピック委員会の方が御参加いただけるのかというところが、例えば選手ではなくてスタッフになるかもしれませんけれども、私どもきちんと交渉して、なるべく幅広くいろいろな方に参加していただける機会をつくらないと我々も事前キャンプの受入れのレガシーというものが残りませんので、それはきちんと努力して、そういった機会をつくりたいと考えております。ありがとうございます。

【瀬戸山委員】　　ありがとうございます。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　　補足ということではないですけれども、市内でもパラリンピックに出られる、今日、そもそも欠席になってしまった成田さんもまだ代表を目指していられると思いますし、若手の陸上選手がいたりもするので、そういう方を応援するという、そもそも市の職員にもウィルチェアーバスケの職員がいるので、そういう者を応援するということは１つあるんですけれども、あともう一つ、今、鴻巣が言ったように、オンラインで本当に予定していたことができなくて、まだ上にも相談をしていないんですけれども、何ができるかと、この間みんなでブレストしてかなりのメニューが出たので、それをちょっと、英国側の理解、ふだんですと時差があってなかなか難しいんですけれども、日本に滞在中であれば時差の問題がクリアできるので、専門的な交流と通常の交流と二本立てで今メニューを作っていますので、それを英国側と交渉、本当に交渉事になってしまうので、交渉させていただければと。

あと応援ツアーにつきましては、ホストタウンであるので、実は３０枚だけチケットをいただいているので、それを市民にというのと、もう少し買えればと思っていて、海外のお客様が来られないので、単純にいうと５０％になっても、まだ多分席はあるんじゃないかという期待もあって、その辺がどうなるのか、組織委員会の動向待ちで、これはキープできているチケットでツアーをやっていきたいと思っております。

以上です。

【福田市長】　　ありがとうございます。とにかく選手団を受け入れるに当たって、何か感染者を受け入れるかのごとく厳しい話になっちゃっているので、交流とかリアルな接触は全く駄目という形なので、ホストタウンとしてのレガシーをどうやってつくっていくのかというのを、本当にない知恵を絞りまくってやらないと何だったんだという話になりかねないので、それは引き続き時間のない中で頑張っていきたいと思います。

ほか何かございますか。資料３と資料４について何かございましたら。

【中森顧問】　　いいですか。

【福田市長】　　お願いいたします。

【中森顧問】　　資料４の別紙のところで、英国チームが大会を終えた後、ホストタウンに戻る。ここで交流されるわけですね。そのときに、ぜひ障害当事者と選手との交流をしていただきたいなという。先ほどお話があった、障害者は我慢していると。イギリスの選手たちは社会に出て、日本のトップ選手もそうなんですけれども、自分の前の道を切り開いてきた。そういう人たちを、特に障害のある子どもたちが接することで心が変わっていくかなと思うので、ぜひお願いしたいなと思う。

もう１点、クワイエットアワーというのがちょっと僕ぴんとこなくて、要は騒音というか、大きな音に対して精神的な不安を持つという、そういう人たちに対する配慮だと思うんですけど、これは大きな商店だけでなくて、日常的にあることなので、個人の問題として、何か個人的に音を少し下げるような機械を個人に与えたほうがより日常的に有効かなと思いました。

今、コロナの影響で夜、若者が路上で話をしたり、そういうことが日常的にうるさいというか騒音の場所があるので、個人の問題として捉えたら、個人にそういう機械を研究してやったほうがいいのかなと単純にちょっと、僕の頭じゃ合わないなという、そんなことを感じました。

以上です。

【福田市長】　　はい、ありがとうございます。クワイエットアワー。

【成沢オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　　はい。クワイエットアワーの感覚過敏のことなんですけれども、大きな音というのもあるんですけれども、例えば今、この会場でもジーというホワイトノイズが鳴っていたりするんですけれども、健常者の方はあまり気にならずに、例えば会話を普通に話せると思うんですけれども、感覚過敏の方は、こういった音というのが優劣なくばっと耳に入ってきてしまうということなので、それでパニックを起こしてしまうということがあって、特にスーパーマーケットに行くと、いろいろな場内アナウンスが流れたり、ＢＧＭが流れたりする中でパニックになってしまうということで、そういった取組がなされているというところです。

個人という意味では、音に対する感覚過敏の方でいいますと、個人でできることというのはイヤーマフをつけて、ヘッドホンみたいな大きなものをつけて、ふだんから自分なり

にガードをされている方もいて、それが何でヘッドホンをつけているんだみたいなことを小学校で言われちゃったりすることがあるらしいんですけれども、そういった偏見とかをなくしていくということも大切なことですし、光に関しても自分自身でサングラスをかけたり、目深の帽子をかぶったりしてやっているということで、そういったこともありますので、私どもとしては、そういったことで生活上の困り事があるんだということをしっかり普及啓発していきたいなと考えております。

【中森顧問】　　分かりました。

【福田市長】　　ありがとうございます。

それでは、その他で何か皆様からございましたら、今日の取組でもいいですし、また、今感じておられることを含めてで結構ですので、何か御意見、せっかくですからいただければと思いますが、いかがでしょうか。

【中森顧問】　　じゃ、口火を切って。

【福田市長】　　お願いいたします。

【中森顧問】　　いろいろな取組、本当にすばらしいと感じております。私自身も知らないこと、いろいろなことを教えてもらって勉強になりました。改めて運営等要綱、今日の資料の一番初めのほうに入っていると思うんですけれども、ここの目的の中に、１番目にスポーツ・健康、でダイバーシティと続いているんですね。

僕自身は、一人一人が活躍できる社会の一番の原点は、それぞれが健康で生き生きと活動できる、そういう状態でなかったらよくないと思うんですね。オリンピック・パラリンピックがあってスポーツに関心が向けられる。それぞれが運動の日常化を促進するようなことをやるべきだなと思います。

チャンピオンスポーツは健康にはよくないから、チャンピオンスポーツは健康を壊す原因になるので、きめ細かい配慮を、医科学の支援、そういうもの、心理的にもいろいろなサポートがあって成り立っているんですね。でも皆さんの健康というのは、筋肉量を落とさないとか、心肺機能をある一定のストレスを与えるとか、そういうことをしないと、今の体力の状況が維持できないですね。今ある皆さんの筋肉の筋力を使わないと、使わない筋力に落ちていくんですね。要は、はあはあ言わないと心臓の機能も落ちてくるわけです。落ちてきたら一気に生活習慣病になって、糖尿病になって、認知症になって、寝たきりになって、こういうふうになっていくので、ぜひ一人一人が健康であるべき川崎市民になってほしいというのが１つ。

２つ目はダイバーシティの観点で、川崎市民が何人いて、その中で年齢構成がどうなのかとか、性の問題でいうと、同性婚の問題があったりとか、性認知の問題があったり、こういう人たちがどれぐらいいるんだとか、あと障害のある人がどれぐらいいるのかとか、先ほど出てきた発達障害であったりとか、感覚過敏の方がどれぐらいいるのか、そういった概要があって、それぞれの人たちが活躍できる社会って何なのと。その人に立った上で、活躍できない理由は何だというのを調べていくべきだろうと思うし、あとは今言った人たちが、一人一人が参加しやすい環境って何だろうかと。

例えば、スポーツの場面で言うと、スタジアムがあれば、車椅子の人たちが観覧できる、そういうスペースがちゃんと用意されているのかとか、あとはお年寄りのほうがお金を持っているケースが多いから、3世代で応援できるような、そういう観客席があるのかとか、あとはそういう宿泊施設があるとか、そういったものが大事かなと。あとトイレとか更衣室については、介護の問題もありますけれども、性差の問題でもあるわけですね。要は生理的には男性だけど、女性になりたい。そうしたら家族更衣室というか、第三の更衣室とか、第三のトイレ、トイレはいろいろあると思いますけど、更衣室なんかはそんなにない。そういう一人一人の、少数の人たちが使いやすい社会というのを見ていくべきかなと思いました。

もう１点、最後には、心のバリアフリーというのは、先ほども分かりづらいと思いましたけど、やっぱり思いやりというか、他者を気遣うとか、そういう精神が今日本人って随分抜けてきたと思うんです。そこを川崎市でうまく取り組んでいく。要はバリアフリー、バリアがあってできないことは、あとは人がやるしかないわけです。人がサポートするしかない。人のことを思いやって、気遣ってサポートする。そういう人が一人一人出てこない限り、完全にはならないと思います。原点に戻ったときにスポーツが薄いなというのを感じたのでちょっと。

【福田市長】　ありがとうございます。非常に多岐にわたるお話をいただきましたけれども、いずれも大切な視点だと思いますし、さらに深めると同時に広げていかなくてはいけないので、引き続き頑張っていきたいと思います。

遠藤さん、いかがでしょうか。

【遠藤委員】　ありがとうございます。今日ちょっと遅れてしまって申し訳ありませんでした。

中森さんのおっしゃっていた話、ものすごい共感します。全体的な個々の課題がたくさ

ん点在している中で、社会がこうあるべきだよねという目標があるんですけれども、皆さんが今紹介されて、僕もすごいすばらしい活動だなと思った。個々の活動はもちろんすばらしいんですけれども、これを通して社会をどうやってデザインしていくかというグランドデザインの観点、全体をどうやってどっちの方向へ進めていくかというところのかじ取りというものがもうちょっと見えたら分かりやすいのかなと思いました。

それで言うと、例えば、僕はこういう具体的な活動まで実行できていなくて申し訳ないんですけれども、レガシーという観点でいうと、例えば障害者のスポーツ実施率というのは、今２０％ぐらいと言われていまして、スポーツ庁は、成人は今５０％台を６５％にしたいという目標がありながらも障害者が低いと。これをどうやって上げるかということに対して、結構助成金をつけたりとか、地方自治体との連携というのを進めているというのをすごい感じていまして、それはやっぱり健康促進、健康寿命が延びるとか、あとはクオリティー・オブ・ライフが高くなるというような目標があるんですけれども、そういったものに対してのアプローチを、パラリンピックを通じてどういうふうに落とし込んでいくかという、今、目先のものに対してできることをやりながら、将来的にはこういう目標があって、こういうストーリーを描いていくということをこれから考えていきたいなと僕も思いました。

あともう１個、僕は最近、ＳＤＧｓ関連のイベントに呼ばれることが多いんですね。パラリンピックとＳＤＧｓってものすごい相性がよくて､不公平をなくそうであったりとか、あとはパートナーシップであったりとか、誰一人取り残さない社会づくりというのはすごい相性がよくて、何となくオリ・パラ関連の部署だけじゃなくて、障害福祉課もそうですし、教育もそうですし、あらゆる部署が関連しているものなので、オリ・パラで終わってレガシーを残すというだけじゃなくて、社会全体に関わることを横展開していけるような体制があったらいいなと思って話を聞いていました。コメントになりますが、ありがとうございます。

【福田市長】　　ありがとうございます。

いかがでしょうか。今日御発言いただいていない方中心に、須藤さん、お願いいたします。

【須藤委員】　　皆さん、お疲れさまです。今日もありがとうございます。今の遠藤さんの話を伺うに、オリ・パラのパラのところは比較的ＳＤＧｓにこれからの流れとしては接続していくんだろうなという印象は私も同じように持っています。

他方、今日の議論の中にはこういう視点は出てこなかったと思うので、私の川崎市民としての個人的な意見も含まれますが、ちょっと皆さんにお聞きしたいなと思うことがあるんですね。これだけ想定外のコロナ禍になり、イギリスでは１０万人以上の方が亡くなっている。そして、アメリカもレベル４を、要するに海外の移動を限りなく禁止、中止していくという方向になった今日に、このパラムーブメントの委員ができる市民へのパラを中心としたパラムーブメントの盛り上げ方という１つの文脈があったことに対して、この不都合な現実を受けて、我々がどういうふうに具体的なアクションをトランスフォームしていけるかというフェーズなんじゃないかと思うんですね。すなわち、オリ・パラの開催を１００％是とすることよりも、むしろ戦略的にそれはにこやかに中止するという意思を表明するという考え方もあっていいんじゃないかなと私は思っています。

一方で、もう既に、今日御発表があった具体的な施策や今日までの川崎市民の活動というのは、非常に具体的で活動的だと認識しています。その中で、この不都合なコロナ禍の現実にあって見えてきた、土岐さんもおっしゃっていましたけれども、オンラインを中心とした、ぐるなびさんもおっしゃっていましたけれども、様々な見えなかった可能性というのも数多いんじゃないかなと認識しているところかと思います。

その中で、リアルな選手との交流や人々の参集というのは限りなく難しくなっている中で、オンラインで結構いけちゃうんですよね。例えばイギリスとのパラ選手とのやり取りも今オンラインで始めればいいんじゃないでしょうか。今、中学生や高校生たちがイギリスのチームの皆さんとの交流をオンラインで始めればいいんじゃないでしょうか。そういう可能性というのを、先ほど遠藤さんがおっしゃったとおり、パラの部署のみならず、教育のセクションとも連携しながら、次世代に対して、この厳しい環境の中でどういうふうに交流していくのかという方向観を立ち上げていく非常に機会でもあるんじゃないかなと思います。ということで、雑感としては以上でございます。

【福田市長】　　ありがとうございます。

今日のそれぞれの取組でもお話があったとおり、いろいろな不都合な状況というのが続いている中で、どうやったらやれるかということに皆さんすごく挑戦してくださって、当初想定していた以上の価値を生み出していただいていると私は今日の取組発表なんか見させていただいて思っております。

須藤委員からお話があったように、制約ある中で、例えば選手との交流をどういうふうにやっていくか。今から始めることができるのかという話もありました。本当にあらゆる

可能性を探っていきたいと思っています。そして、コロナじゃなかったときよりももっといいものというか、新しい価値だとか、多くの人が参加できるとかというふうなものにトランスフォームしていく必要があると思っていますので、引き続き御指導いただければと思っています。

ほかいかがでしょうか。どうぞ。

【原オリンピック・パラリンピック推進室長】　先ほど中森委員と遠藤委員から言われた全体的にどういうふうに、細かい事業ではなくて全体像をどういうふうに到達させるかというお話も含まれていたかと思いますけれども、隣に市長、副市長がいて、部下がいる前であれですけど、このパラムーブメント第２期推進ビジョンをつくったときに９つのレガシーを定めて、そのときあくまでも頂上を書いているんですと、ここに向けて進んでいくんだというお話をさせていただいて、今日、冒頭市長の挨拶にもございましたが、今年度そのビジョンが終わる年で、次をどうするかという議論をしなければいけないので、当然行政内部としては、どういうところに今達していて、今後、どう階段を上がっていくのかみたいな議論をしていかなければいけないと思っていますので、また、この会議等で、途中で御意見をいただきながらという部分も出てくるのかなと思っておりますので、今年度そうしたことも視野に入れていきたいと思います。

あと中森委員から人数的なお話があって、人口的にはたしか１５４万弱かなと思っていますけれども、障害者は５万弱なんですね。それぞれ分類はありますけど。あとセクシュアルマイノリティーの方というのは正直つかみ切れていないという、世界的な比率でいうと８％ぐらいの方がいらっしゃると言われていますので、市役所の中では押さえられていない、市全体として押さえられていないという状況はございます。そこは御報告ということで。

【福田市長】　まず、このパラムーブメントのそもそも論の話というのは、つくったときに御紹介しているとおりなんですけれども、障害のあるなしにかかわらず、誰もが互いに尊重して共生していく社会を目指すというのは、やや福祉的な計画の目標に見えますが、決してそんなことはなくて、福祉の世界じゃない、ユニバーサルな全ての社会なんだと。働くところもそうですし、遊び方もそうですし、いろいろな表現活動のところもそうですしというふうな、そういう意味では、非常に高い目標ではありますけれども、そこに向かって僕たちがいろいろな取組によって少しずついろいろなものを変えていくというのは、正直言ってこの数年間、このメンバーの皆さんからいただいた示唆だとか、あるいはこう

いったことを具体的にやってみたらどうだろうということで進んで皆起きたことというのは、このメンバーがいなければできなかったことばかりだなと思っています。

そういった意味で、この２期推進ビジョンの最終年度にはなりますけれども、ここは冒頭申し上げたとおり終わることがありませんので、引き続き、どういう形でやっていくかというのはこれから内部で詰めていきますけれども、ぜひ御協力、先ほど菊地さんもこういう形でボランティアの形ができたんだから、次に自分も入って生かしていきたいというふうな話と同じように、できたプロジェクトを一過性のものにするんじゃなくて、それを昇華していくというふうな形にしていかなければ、プロジェクトの意味がないかなと思っております。

草壁会頭のお話もそうです。アクセス数の面で閲覧は少しずつ出てきていましたよね。でも、まち全体はどうでしょうかねということは、じゃあ次のステップへ行きましょうかというふうな形にやっていかなくてはいけないと思いますし、教育もどうでしょうという話もそうですし、至るところでまだまだ課題は道半ばだと思っております。

よろしいでしょうか。オンラインで参加していただいている皆様も御発言ございませんか。議題はその程度ですけど、事務局から報告、お知らせはあるんでしたっけ。

【井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　特にございません。

【福田市長】　チラシとかもよろしいですか。

【井上オリンピック・パラリンピック推進室担当課長】　はい。大丈夫です。

【福田市長】　はい、どうぞ。

【遠藤委員】　勇気を出して言うんですけれども、須藤委員がすごい大事なことを言ったなと思っていて、今、オリンピック・パラリンピックの開催に関してものすごい批判的な意見というのは多いと思うんですね。僕は正直、オリ・パラやることには賛成です。ただ、それに対しての意義みたいなものはちゃんと考えて発信していかないとひどい目に遭うというか、それをやることによっていい方向に進むんだよという強い意志がないとできないと思うんですけれども、多分この中で反対することは置いておいて、その時期になれば、みんなが盛り上がるに違いないみたいな考えをしているんだったら、もうちょっと考えたほうがいいのかなというふうには思います。市長はどんな、僕はこういう活動をしていると結構な批判を食らうんですけれども、これまでにどのようなことがありましたでしょうか。

まず、障害者、お金もうけをすると言うんですけれども、正直、僕はそうなんです。障

害者を使ってお金もうけをしている会社なんです。それは、僕が法外にもうけているわけではなくて、ちゃんとそれが社会に役に立つような方向でビジネスをするという考え方なんですけれども、日本ではそれがものすごい批判的な考え方に取られる。だから何となく覆い隠して発信することが多いんですけれども、ＳＤＧｓの本質というのは、サステイナブルな社会をちゃんとビジネスという観点でも回していく。パラムーブメントも障害者のコミュニティをダイバーシティ、インクルージョンという社会をちゃんと回していくような仕組みづくりだと思うんです。これは経済を回していくということにほかならないと思う。なので、ここでオリ・パラの反対意見に対して耳を塞ぐようなことは多分してはいけないんだろうなというようなことを須藤さんの話を聞いて感じました。

【福田市長】　　ありがとうございます。賛成・反対というと非常に強烈な話ですけれども、私はやるべきだと思っているんです。それはこれまでもずっと申し上げているとおり、いろいろな制約がある中で、それでもできることをやっていくというふうなこと。オリンピックムーブメントの一番最初のところで何が大切かと言ったら、オリンピック、スポーツというものを通じて若い人たちを教育して、より平和な社会を構築するということがオリンピックの理念、あるいはパラリンピックの理念というのは、共生社会をつくっていくということだと思うんです。その目標に対して、この大会はただのスポーツイベントではないというふうに捉えているからなんです。これまでパラムーブメントでやってきたことも、これまで教育現場でやってきたことというのは、ずっと一連の作業、それを僕たちはやってきたと思っていて、それを大会というふうなものを通じて取り組んできた。

ですから、コロナで非常に厳しいところはありますけど、これからもしかしたら無観客になるかもしれない。これから選手たちの交流というのが非常に厳しいかもしれない。それでも、この大会を通じて生み出せるものというのを限りなく探っていくべきだと思っています。

例えば市の取組でも、成人式だとか、あるいは修学旅行だとかというのを、やめろやめろの大合唱でした。とにかくちょっと僕も、これ殺されるんじゃないかなと思うような御批判もたくさんありましたけれども、それでもどうやったらできるのかということを探って、代替方法も考えてということをやってきました。それには成人式には成人式の意味があるし、そこに向けて頑張ってきた人たちの努力というのも絶対に無にしてはならないと思っていたし、子どもたちにとっても修学旅行というのは、オリンピックとは違うかもしれないけれども、小学生にとっては修学旅行、中学生にとっても修学旅行というのは、そ

れなりの中長期的な目的であったり、教育的な意義がある。それを簡単になくしてしまっていいのかというところに僕はものすごく抵抗を感じて、その意義というものを強調してきたつもりです。

ですから、オリンピックについてもいろいろな制限がこれからもかかってくるかもしれないけれども、そもそもオリンピックをやるということが何だったのかということを改めてみんなで考えて、それに向けて取り組んでいくことが必要だと思っています。

【須藤委員】　いいですね。そうです。

【福田市長】　そういう意味で、賛成・反対ということで議論を分断することというのは非常に嫌だなと思っています。もう少し緩やかな形で、そうだよね、反対する気持ちも分かるなと僕自身も思っています。その中で、僕の考え方を申し上げましたけれども、例えば須藤さんが自分は反対だと思われていたとしても、全く私、否定するつもりもありませんし、その気持ちというのを受け止めたいと思っています。

【須藤委員】　賛成か反対かというのは、市長おっしゃるとおり、あるいは遠藤さんが振ってくださったとおり、市民１５０万以上いれば、１５０万通りの考え方があってもちろんいいと思うんです。重要なことは、今、福田市長にお話しいただいたように、こういうテーマの議論、まさに不都合な想定外の現実があったときに、じゃあ我々市民、国民として、あるいは地球市民としてどう考えていくのかという、こういう議論こそが一番重要なんじゃないかなと思うんです。

そういう意味で、今日の風景をこっち側からリモートで見て、改めて認識したんですけれども、年齢層で言うと、私も含めておじさん、おばさんで、次世代の人たちがいないということについてもトランスフォームするという余地は十分あるなということも含めまして、ぜひ次回以降、また中学・高校生の世代間も含めて、こういった議論やいろいろな答えがあっていいという前提の中で闊達に進むような会になると、さらに実りのある委員会になるんじゃないかなと改めて感じました。それぞれの御説明ありがとうございます。

【福田市長】　ありがとうございます。本当にこういう協議の場だとか、市役所の審議会とかもそうですけれども、より多様な意見を聞いていくというのは、年齢もそうです、性別もそうですし、性自認のところもそうですけれども、幅広いところの意見を取らないと、やっぱり世の中ちょっとずつおかしくなっていくよなということを自覚しながら運営に努めたいと思っています。ありがとうございます。

それでは、議題は以上となりますけれども、特に皆様からなければ、これで終了したい

と思いますが、よろしいでしょうか。

大変お忙しい中、御出席をいただきまして、誠にありがとうございました。

事務局に戻します。

【原オリンピック･パラリンピック推進室長】　いつもの事務連絡になりますけれども、議事内容をホームページで掲載しますので、追って事務局から出席委員の皆様に発言内容等の御確認をさせていただきますので、よろしくお願いいたします。

一度ここで会議を閉めさせていただきますけれども、先ほど触れましたバリアフルレストランのカフェの動画ですとか、英国の動画をこれからお流ししますので、もしお時間に余裕のある方は、ぜひ御覧いただければと思います。

市長は他の公務があるので、ここで御退席を。

【福田市長】　どうもありがとうございました。

―― 了 ――